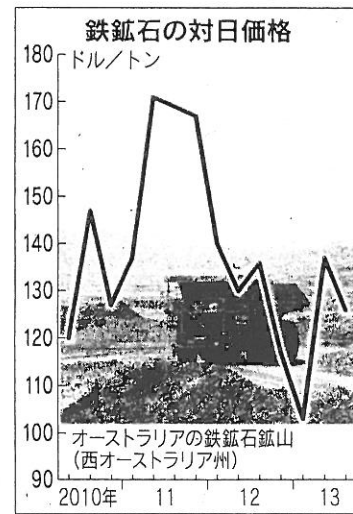


世界の鉄、中国が揺らす

新日鉄住金やJFEスチールなど、日本の鉄鋼大手が調達する鉄鉱石の契約価格（ドル建て）が再び下がりはじめた。7～9月は前四半期に比べて8%程度下落する。粗鋼生産量が世界最大の中国の景気回復が鈍く、過剰生産から在庫が積み上がっているためだ。中国の需要減退から、国際的な素材価格の動きが不安定さを増している。

日本の鉄鋼大手向けの鉄鉱石の契約価格は、7～9月は1トン126ドル（約1万2500円）となる。4～6月に比べて約11%下がる。下落は2

輸入鉄鉱石、7～9月8%下落 在庫過剰で需要減



四半期ぶり。本来ならば、かかったが、12年末から日本の鉄鋼各社は田安・ドル高傾向で大幅なコスト増に見舞われるはずだが、国際価格の低下でその影響が緩和される。このところ、鉄鉱石の国際価格は乱高下を繰り返している。2012年に大幅な価格下落に歯止めが

かかったが、12年末から再び価格が下落。13年に入って急上昇に転じたものの、足元では価格が下がっている。背景にあるのは、世界の粗鋼生産のほぼ半分を占める中国景気の回復の鈍さと、過剰な生産能力だ。

中国鉄鋼は昨年からの景

気テコ入れに動いた。さらに鋼材価格下落で採算が悪化している中国の鉄鋼会社や商社は「資源会社からの購入価格を引き下げて仕入れている」（日本大手商社）。これをふまえて、英豪リオ・ティントなどの大手資源会社は国際価格を引き下げた。これまで中国の旺盛な需要に振り回されてきた日本の鉄鋼大手だが、今回は中国の需要減退が円安下の価格低下という恩恵をもたらした。

中国国家统计局によると、4月の卸売物価指数は前年同月比2.6%低下し、14カ月連続で前年水準を下回った。素材の在庫が高水準にあり、企業間取引が振るわなかったためとみられる。過剰な在庫を抱え、さ

らに鋼材価格下落で採算が悪化している中国の鉄鋼会社や商社は「資源会社からの購入価格を引き下げて仕入れている」（日本大手商社）。これをふまえて、英豪リオ・ティントなどの大手資源会社は国際価格を引き下げた。これまで中国の旺盛な需要に振り回されてきた日本の鉄鋼大手だが、今回は中国の需要減退が円安下の価格低下という恩恵をもたらした。

世界経済をけん引してきた中国の景気変動は鉄鉱石に限らず、国際商品市況全体に大きな影響を及ぼしている。

衣料に使うポリエステル繊維やペットボトルの原料となる高純度テレフタル酸は供給増で、アシ

ア価格がこの3カ月、1割下落した。昨年、中国での工場の新増設目立ち、13年の生産は前年比4割増える。三菱ケミカルやルディンクスの小林社長は「供給があまりも多い」と話す。

国内の石油化学製品も影響が及んでいる。化製品の原料になる「サ（粗製ガソリン）」の取引価格は中東の取引価格は中国の要の鈍さを反映して、これまでに比べて15%安い。各社は2月末にナフタレンを見込んで、レバノンに使うポリエチレンなどを国内で約6%下げする方針を表明している。だが最近のナフタレン下落から顧客との値交渉が難航している。

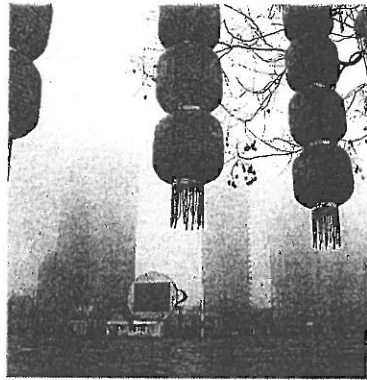
大気汚染、なぜ北京で深刻に

発展を優先、対策後回し



中国では1月、北京を中心に日本の面積をはるかに超える範囲が重度の大気汚染に覆われた。体調を崩した子どもが病院に詰めかけ、工場停止など経済にも大きな影響を与えつつある。原因や今後の対策などを探った。

Q 汚染の原因は。
A 問題となっているのは直径2.5ミクロン（以下100万分の1）以下の微粒子状物質「PM2.5」だ。石炭や石油を



有害物質を含む濃霧に包まれる中国河南省平頂山市（4日）＝共同

燃やしたときに出る硫酸酸化物が原因で、中国に多く残る石炭火力発電所の排ガスが主因といわれる。自動車の排ガスの微粒子なども含まれる。直径が小さいため、肺の奥深くまで入り込みやすい。気管支炎を引き起こしたり、ぜんそくを悪化させたりする。

Q 汚染はどの程度か。
A 米国大使館は2008年春から北京市内にある大使館の建物の上でPM2.5の濃度を測定し始めた。北京市も1997年から空気汚染指数を測定してきたが基準は緩く、米国大使館と北京市の公表数値のギャップが問題となっていた。市民の批判を受け、北京市も12年1月からPM2.5の濃度測定値を公表し始めた。北京ではPM2.5の測定値が米国大使館が「危険」とする1立方メートルあたり250ミクロンを上回った日が1月は15日を超えた。一時は500ミクロンを超えて「計測不能」という日もあった。

暖房の石炭消費増える

北京の上空は大気が安定し、風が吹かなかったことが北京の大気汚染をひどくし、長引かせた。

Q 大気汚染はいつからひどくなったのか。
A 鄧小平氏が78年に掲げた改革・開放路線を受けて経済開発が始まり、すでに80年代後半には環境破壊が問題となっていた。98年には北京の空気汚染指数が急速に悪化したとし、当時の朱鎔基首相が対策を急ぐよう指示した。ただその後も経済発展を優先し環境対策は後回しとなった。

国際的な印象を良くしようとして、08年の北京五輪前には、首都鋼鉄集団の工場など北京市内にある工場を市外に移転させ、市内の150超の工

北京の上空は大気が安定し、風が吹かなかったことが北京の大気汚染をひどくし、長引かせた。

Q 大気汚染はいつからひどくなったのか。
A 鄧小平氏が78年に掲げた改革・開放路線を受けて経済開発が始まり、すでに80年代後半には環境破壊が問題となっていた。98年には北京の空気汚染指数が急速に悪化したとし、当時の朱鎔基首相が対策を急ぐよう指示した。ただその後も経済発展を優先し環境対策は後回しとなった。

国際的な印象を良くしようとして、08年の北京五輪前には、首都鋼鉄集団の工場など北京市内にある工場を市外に移転させ、市内の150超の工

場も一時的に操業停止させた。北京五輪後は空気が良くなったと話題になったが、抜本対策に乏しく、大気汚染は再び深刻になっていった。

Q 対策は。
A 今回、北京市は公用車の使用を30%削減したほか、一部工場の操業を停止させるなどの臨時措置を講じた。北京を含むいくつかの都市では、大気中の汚染物質を地表に落とすため人工降雨も実施したようだ。いずれも場当たり的な対応にすぎない。結局2月1日未明に大風が吹くまで北京に靄空は戻らなかった。

Q 日本にも中国から飛んできているのか。
A 今年1月、福岡市などの観測所で、通常の

3倍の数値が出たという。ほかに西日本の各地で高い値が瞬間的に記録されている。上空の偏西風に乗って大陸から飛来した汚染物質が原因と考えられている。

Q 対応策はあるのか。
A 欧州は越境する大気汚染物質を規制する条約があるが、その他の地域にこうした枠組みはない。大陸から汚染物質が飛来しているとしても、環境規制を厳しくするかどうかは中国の判断次第。日本は観測を強化して注意を呼びかけるしかないのが現状だ。環境省は「そらめ君」というサイトで各地の観測情報公開している。